

地域調査報告 気仙沼市における無形民俗文化財の調査記録（Ⅱ）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 土取, 俊輝, 相澤, 卓郎, 梅屋, 潔 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/527

〈地域調査報告〉

気仙沼市における無形民俗文化財の調査記録（Ⅱ）

土取俊輝¹・相澤卓郎²・梅屋 潔³¹神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程 ²東北学院大学大学院人間情報学研究科博士前期課程³神戸大学大学院国際文化学研究科

I はじめに

本稿は、本誌第4号に掲載された同名の報告「気仙沼市における無形民俗文化財の調査記録（Ⅰ）」[相澤・齋藤・土取・梅屋 2013]（以下単に（Ⅰ）と呼ぶ）の続編である。その後、（Ⅰ）については、インタビューに応じてくださった話者も含む現地からも一定の反響があったので、そのことについては、十分な検討を踏まえて今後報告する予定である。何よりも一読いただいた方々、コメント、ご批判をお寄せいただいた方々には感謝申し上げたい。その反響の詳細については、（Ⅲ）以降であらためて報告したい。

その内容についても関係するのだが、はじめにいくつか申し述べておきたい。従来は、こうした社会調査は、何回も訪問したうえでインタビュー内容の裏も利害関係の異なる別な話者からの聞き書きできっちり押さえ、報告書も含めた先行研究の文献、新聞など各種媒体の入手可能な傍証も踏まえたうえで活字にすることが当然とされていた。しかし、この報告書はある意味では裏づけ資料は不十分なまま、聞いた内容を完全には咀嚼しきれないまま、公開しているものである。その理由はいくつかあるが、第一に、この同じテーマで何回もインタビューを重ねる余裕がなかったことが挙げられる。震災後の宮城県の無形民俗文化財の実態調査を牽引した一人である高倉浩樹（東北大学教授）はたびたび、震災以前の行事の記録が驚くほど不十分だったことに嘆息する。神輿などの姿形を記録したもの（設計図はおろか写真のようなものさえ）が全くないような例があちこちで報告されたからである。これは、社会主義

国家の成立過程で徹底した「民族」の記録・分析がされており、またその後の社会主義体制の終焉以降にもつねに周縁部として記録の対象とされてきた地域を専門とする高倉には信じがたいことのようにだった。郷土史家であれ民俗学者であれ、すべてを同じ労力と情熱で記録に残せるわけではない。記録には選択性があり、記録が残されるかどうかはさまざまな歴史性と政治性のもとでもあったのは当然のことだったのである。

思えば共著者のひとりである梅屋が気仙沼との関係ができる機縁となった「室根神社大祭」も岩崎敏夫という民俗学者と姫田忠義という映像民俗学者の存在抜きには語れない。岩崎が委員を務める国の委員会で無形文化財に指定され（1985年1月12日）、姫田らが民族映像研究所作品として「陸奥室根の荒まつり」（1986年、57分）を制作しなければ、大いに違った形態で伝承されていただろうことは想像に難くない。国の指定という権威により固定され、映像というかたちでメディアに固定されたからこそ、その伝承が安定し、評価も定まったことは改めていうまでもないことである。

もちろん、本報告の執筆者が気仙沼の、しかも鹿折を中心とした無形文化財の記述に携わったのも多様な偶然と関係性の絡み合いであり、そこにはミクロなものではあるが歴史性も政治性も不可避的に内在している。あたりまえの話である。そのような時間性を逃れてぽっかり存在する行事はあり得ず、それを記述する営為にしたところで、何がしかの政治性を逃れて、純粋な中立的立場などはない。すべての立場は関係的で、政治的なものである。もちろん、ここでいう政治性は、意図的に目指す目的を達成するためにあからさまな権

力を陰に陽に行行使する類のものを意味しないことも言うまでもないことである。

くどいが確認しておく、梅屋が2005年から2009年まで東北学院につとめておらず、就職する早々当時教養学部長だった佐々木俊三の命により気仙沼で市民講師を務めていなければ、この一連の調査で頼りにした同窓会との関係は生まれなかったであろう。また、梅屋が東北学院大学教授である政岡伸洋と旧知であり、その盟友だった小谷竜介が、文化財保護課にいなかったら、こうした調査に参加することもなかったかもしれない。それらの経緯は、さまざまなかたちで報告しているのでこれ以上ここでは繰り返さないが、あらためて確認したわけである [梅屋 2012]。

この歴史性と政治性にある意味では拘束され規定されたわれわれの無形文化財調査の営為に関する限り、プライオリティは、われわれが優れた分析を提示して、斯界に理論的に貢献することにはない。いかに、聞いたままをできるだけ、誰か別の人に利用できるかたちで残していくかにあると思われる。

また、本誌は、ウェブ上で公開されているので、かつてと比して非常に多くの方の目に触れることができるであろう。そのような環境で、できるだけフラットなかたちで記録を残していこうすることに意味があると感じている。これは必ずしも津波などの決定的な災害で「ゼロポイント」ができてしまう前を静態的なものとして記述しようとする試みではない。むしろ、それ自体が暫定的なものであるカルチャーの一つの暫定的な表現でもある。ネット上に記されたものは、断りなく書き加えられたり、書き直されたりするし（ログが残るのがデジタルの特徴だが）、そのサーキュレーションの範囲もまちまちである。そういった一コマとしてとらえて、誤りがあつたらいつでも教えて欲しい。それが著者たちの願いである。いつでも修正する覚悟はある。というよりもそもそも「文化」が改変可能性に乏しいとは、われわれは考えていない。

一方で、さほどインパクトを広く大きく与える

ものではなくとも、非常に重要な資料となった例はいくつもある。ここでは筑波大学の実習報告書を例に挙げておきたい。『平成11年度民俗学実習Ⅱ・文化人類学実習Ⅱ報告書—気仙沼市唐桑町』[筑波大学民俗学研究室 2000]である。これは印刷・製本はなされたものの、広く出回ったものではなく、1999年10月24日から29日までの5泊6日の調査実習の報告は、この地域の当事者はもちろん、編集責任として名を連ねるものにとっても、忘却の彼方にあった。しかしながら狭い意味での地域文化の記録、と言う意味では、その内容は極めて深い洞察を含むものだった。私の関心に即していえば、すでにこのなかで扱われているオガミサンはあらゆる取材を断っており、現在は調査することが不可能である。また、津波によって氏子の範囲が変化したことを地図の上で丹念に跡づけた只越の例も現在では歴史的事実となっており、示唆に富んでいる。

また別の例として、卒業論文の出版という事業に取り組み続けた故岩崎敏夫の功績も忘れることができない。岩崎が万葉堂書店から10年間にわたって出し続けた『東北民俗資料集』は、その分析の深度や完成度こそむらがあるが、その資料のなかには今日望んでも得られないことがないものが多く含まれていることは一見して明らかであろう。現在ではケンブリッジ大学図書館にも保管され、その分野の研究者にはさまざまな形で利用されているものだ。本報告は、このような例をめざした、言葉の真の意味での中間報告のひとつとして読まれることを期待している。

例によって経緯や調査計画の概要などは再掲しない。なお、本稿の特に「2. 平磯芸能保存会」については、成城大学の俵木悟准教授に資料提供と助言をいただいた。

以下（I）より報告の内容が続く。

○2012年第一次調査の続き

1. 尾崎郷和会（7月15日10:00）

震災後も変わらぬ活動が続けられる団体がある

一方、震災により保存会はおろか自治会の解散にまで追い込まれた地域もある。松岩尾崎地区では、再建の見通しがある程度たったところで自治会である郷和会の解散を考えている。尾崎修也氏と畠山司氏が対応してくれた。

尾崎地区では地区の全戸におよぶ89世帯304名のほぼすべてが被害を受けた。大半の住宅は津波により倒壊し、集落跡には津波に流された家の基礎部分のみが残る光景が広がる。犠牲者は27名におよんだ。そのうち震災で死亡したのは26名で、あとの1名は関連死であった。尾崎郷和会のメンバーは震災で分散し、面瀬地区の仮設住宅に30世帯が暮らしている他、自立再建した人、アパートに移った人などもいる。住民は2012年現在松岩面瀬中学校に建設された仮設住宅に移り住んでいる。集団移転を検討しているが、移転先が思うように決まらず厳しい生活を強いられている。震災のため、演舞用に残っているものはほとんどない。

尾崎郷和会は明治時代に成立した。1881年（明治14年）、疫病が世に蔓延していたが、尾崎地区では八幡神社への祈願の甲斐あって疫病が流行ることはなかった。そのお礼参りとして行列を組織して八幡神社に奉納したのが始まりである。本吉の山田大名行列に習っており、それがベースになっている。尾崎郷和会は、尾崎地区の自治会（八幡神社の氏子）を母体としており、血縁・地縁関係で構成されていた。自治会の人すべてが家で加入する。行列に参加していたのは約120名。一番多い時で約200名が在籍していた。メンバーシップの範囲については、2000年度、18年振りにみなとまつりに参加する際に門戸を広げた。そのため、尾崎に縁がある人、関心がある人でも参加できるようになった。その際には地区内の衣装の調査を行った。

会費は1戸あたり1万円で、郷和会の全89戸から集める。2007年（平成19年）に、宝くじ財団から道具代の援助150万円を得た。この助成金で行列の衣装と道具を新調した。また、昨年（2011年）の伝統芸能継承事業に際し、文化庁から90万円の助成金を得た。これは文化庁が無形文化財の様子

を記録する事業であり、そのための助成金であった。90万円のうち75万円はみなとまつりへの参加をビデオで記録するために使用している。残りの15万円でオオトリゲ（大鳥毛）を1本新調した。

2000年（平成12年）7月30日、第50回みなと祭り参加の際の練習風景を収めたビデオがある。仮設住宅で見せてもらった。行列は2列で、120～130人で構成される。最も多い時期で200人が参加した。「ヤーヤオイヤ ヤーヤドドセイ ヤーヤサササイ」の掛け声とともに進む。途中、隣の列にオオトリゲの受け渡しを行う。受け渡しは、掛け声の節目ごとに行われる。

主な練習場所は尾崎地区の空き地で、行事が近くなると行っていた。また、子供たちを集めて、大名行列の所作を教えた。それは数名で列を作り、先頭が前に立って、その動作を子供たちがまねるというものであった。太鼓などとは違い、動作になるので、一人一人で若干の違いが出る。基本的には夕方以降に練習するが、「総練習」（全体練習か）の時は昼から行う。定期的に練習するようなことはなかった。

衣装は参加者が自前で用意する。会の所有物は、オオトリゲ数本である。八幡様のオサガリの時に、随行する形で演舞を披露していた。これは毎年続けられてきたが、1964年（昭和39）以降は職業の多様化により当日の人手不足がおこったことや、新道の建設にあたり行列の実施が難しくなったことから4年に1度の参加とすることになった。

しばらくはこのペースで演武が披露されてきたが、1988年以降は披露されることはなかった。だが、2000年のみなと祭りに参加し、12年ぶりに披露することとなった。その3年後となる2003年、市制50周年記念に参加する。これ以降、演舞を披露することが途絶えていた。一度演舞の実施が決定されると、皆はそれに従う。その代わり、それまでに反対意見などを徹底的に出すため、会議は激しいものになる¹⁾。行列を編成するのは、とても大変である。さらに、同好会ではなく、保存会であるため、近年職業の多様化によって若い人に保存会の催しが浸透せず、演目を披露しない時期

が長かった。震災の起こった2011年は、文化庁主催の民俗芸能記録保存事業に大名行列が対象となり、8年ぶりに披露の機会を得た年だった。再活動にむけ本格的に動き出した矢先で震災を迎えた。

先述したように、尾崎郷和会があった尾崎地区は、東日本大震災の津波によって壊滅的な被害を受け、郷和会の構成員は仮設住宅やアパートなどにわかれて生活している。お話をうかがった尾形氏と畠山氏は面瀬中学校の仮設住宅で生活している。尾形氏は構成員の連絡先を把握しているものの、震災後に開かれた地区の会合を通して、郷和会の存続、つまり尾崎大名行列の継承は困難であると考えざるを得ない状況にあり、会の解散を示唆している。具体的には、尾崎の慰霊祭（10月の第4日曜日）の際に、解散することを考えている（ただし、その時までには再建の目処が立っていることが前提としてある）。これに対して気仙沼市は自治会（郷和会）に解散しないで欲しいと考えている。これは、郷和会のネットワークが今後の集団移転の際などに必要だと考えているからである。

震災以前から、尾崎大名行列は仕事や宗教の多様化により実施が難しくなっていた。しかし、一部の住民たちにとっては誇りを伴ったものとして実施されてきた。聞き取りに応じていただいた畠山司氏は、「私たちが子供の時には、行列ということで学校を早退することも認められた。学校の早引けは、単純に早く学校から帰ってこられるという喜びと、学校行事とは違う、地区を背負うのだという誇りをもったものでうれしいものだった」と語った。しかしながら、現在では各々の事情などがあり今後続けていくのは難しいのではとも語っていた。

2. 平磯芸能保存会（7月15日13:00）

旧本吉町の平磯地区にある、有限会社カネダイ大谷給油所で、代表取締役の熊谷茂氏に話をうかがう。地区の人々は、須賀神社の氏子で、全部で450世帯ある。平磯地区は日門（ひかど）・前浜（まえはま）・高（たか）という3つの地区から成っ

ており、これが旧平磯村を構成していた。須賀神社は平磯村の鎮守である。震災による人的被害はなかったものの、道具を置いていた集会所が被災し、太鼓が大小合わせ5張、法被、虎頭（昭和35年から使用）、虎の皮が津波で流出した。また、元々の練習場所となっていた集会所（日門コミュニティセンター）も流出した。

虎頭は、会長宅に保管されていたものが一つあり、これは流されなかった。製作者は、1960年（昭和35年）に仙台から来た人達である。竹ザルを用いて作られており、これはふつう演目に使われるものとは違うものである。

震災後の2012年2月に日本財団（県太鼓連盟を通じて）から120万円、日本青年館から170万円の支援金を受け、太鼓の修復をし、虎頭を新調した。その他現物支援として総額700～800万円ほどにもなる太鼓などが送られてきた。その他にも、山形県の建設会社から20万円の義捐金を頂いた。

平磯地区の虎舞は、戦後の一時期伝承が途絶えていたが、1969年（昭和44）に青年会を中心に復活させ、翌1970年（昭和45）の日本青年館「全国青年大会」郷土芸能の部で優秀賞（最優秀に次ぐ賞）を受賞した。1971年（昭和46）に、地区の青年会25名が母体となって平磯芸能保存会が結成された。1979年（昭和54）から子供の部が成立したが、今は少子化により、一本化している。保存会設立後は子供の育成を主な目的とした。

当初は平磯地区の中でも日門地区の子供だけで構成されていた。後に、平磯全体にまで広がり、さらに時期ははっきりしないが、平成の初め頃には大谷小学校（学区は平磯と隣の岩尻地区）の子供なら誰でもよいということになった。近年では少子化の煽りを受け地区外の見学も参加可能となっている。

また、生涯学習の一環として、地区の小学校で虎舞の指導を行っている。これには、地区の小学校が2011年（平成23）に宮城県教育委員会から研究指定校に指定され、総合学習の時間などが強化されたことが関係している。現在の会員は約40名で、女性会員もいる。震災前、子供は12～13名だっ

たが、震災後参加資格の範囲を広げると、約30名に増えた。これには、先述した小学校の学習の環境として虎舞が取り入れられたこと、震災後、大谷学区など他学区の子どもが加入（2～3名）したことがその理由としてあげられる。

練習場所として地区の集会所を借りる（震災前）など、自治会との関りもあり、自治会の前で虎舞を披露することもある。保存会と自治会の構成員は重複している。

年会費は1000円程度。ただし、ここ10年間は入会者を増やすために会費を取らずに入会させている。その他、保護者会が差し入れとしてアイスや飲み物のための出費をする。

曲目は、「通り囃子」「剣囃子」「おかざき」。演舞は、虎舞と打ち囃子を組み合わせたもので、明治30年代頃、地元日門の大原清松という人が、岩手県方面から習い覚えたものを基礎として創意工夫を凝らし、郷土のものとして完成したという。

虎のしぐさに細かい芸が有り、演技（15～20分）の際、台に上って虎舞をする。演舞の筋書きは、旧暦3月15日に、平磯地区にある山（実際の山手の地名²⁾に言及される）そこから虎が降りてきて、煌々と照らされる海岸で踊り、眠り込んでしまう。そこにウサギがやってきて、眠っている虎を起こし、また山に帰っていく、というものである。

練習日は、週1回（水曜）、2時間。現在の練習場は、震災後、滋賀大学の教授やボランティアの学生を中心として建てられたコミュニティ・センター「竹の会所」（大谷給与所より道路を挟んで向かい側にある。竹でできたテント様のもの）を借りている。また、この敷地内にある土蔵を借りて、道具を保管している。

演舞を披露する場は、須賀神社（平磯地区・氏子450世帯。旧暦3月15日）の祭典、地区の夏まつり（8月14日）、第61回全国民俗芸能大会（平成24年11月17日）、敬老会、復興祭（2011年の夏祭りの名称。これに間に合わせるために太鼓の修理をしたり、他の団体から太鼓や半被を借りた）、東北6県の支援を受けた団体が感謝するイベント（2012年7月1日）、気仙沼みなとまつりなどで

ある。

3. 大谷大漁唄込保存会（7月15日14:30）

及川一郎氏と及川善正氏に話をうかがった。善正氏は会長であり、一郎氏と共に指導係を務めている。1981年（昭和56年）に青年会を母体として現在の名称の保存会が成立。当時大谷漁業協同組合長であった畠山毅氏を中心に、定置網漁師60余名の会員による保存・伝承活動を開始した。漁師の中には親子、兄弟もいた。1993年（平成5）に大谷公民館の事業に組み込まれ、1997年（平成9）になると、唄い、聞きあう活動に観る要素（踊り）が加わった。

保存会会員は、34～5名だが、常時いるのは28名ほどである。会員の年齢は、55歳～77歳まで。1993年（平成5年）より女性も入会し、現在全メンバー中12人が女性である。

震災により、保存会会員のうち2名が行方不明である。演目に使用する船も流されてしまった。消防団の構成員55名中20名の自宅が津波により被害を受ける。会員個人で所有していた半被とTシャツに加え、練習場所兼道具の保管場所になっていた大浜マリンセンターも津波の被害を受ける。

会費はなし。イベント出演時も出演料は取らず、交通費・宿泊費と言った最低限の費用のみいただく。ご祝儀等もなしである。ただし、今後会の運営に支障をきたすようなら、考えるとのことであった。

演舞は、前唄としての「鑄銭節」、本唄の「どや節」、その場を盛り上げる「浜甚句」の3種の組唄からなる。唄+網おこしで所要時間は9分半ほど（唄は5番までに短縮）。どや節だけを唄う地域が多いとのこと。盛大に唄い込むのは、定置網の仕事始めの「番屋入り」、沖に網を設置する際の碇作業、初めての「網起こし」とはじめての「漁」、鯛やまぐろの初漁や大漁の時、そして漁期が終わり切り揚げ時に精算をする時などとなっている。3つのうち、浜甚句は大谷オリジナルのもので、4節目には地区名が入る（明戸にゃ戸倉

可愛い日門にゃ)。

演舞の発祥については、定かではないが、定着したのは大谷海岸の沖合に設置された、大型の「大謀網」と言われる定置網によって、夏漁であるまぐろの大漁が本格化した1929年(昭和4年)ごろではないかと言われている。初代会長の穀氏が、各港でばらばらに行われていたものを統一したものの。それぞれ、どのような由来で行われていたかは不明である。

本番が近くなると、何回か練習する程度で、定期的な練習はしていない。震災後は2011年7月に久しぶりに練習をおこなったが、以降は忙しくなかなか練習できない。

会の所有物は、演舞に使用する船、波、貝、まぐろ3匹(これらは小道具)、台、旗、半被、Tシャツ。これらの道具の保管場所は、震災前は前浜マリセンターの集会所。震災後は及川氏の家の蔵。Tシャツ(製作は平成21年)、かっぱズボンは個人で保管している。

会には、年間20本を超える公演依頼があるとのこと。そのほか、1985年(昭和60年)、大谷小学校にて、生涯学習の一環として指導を行っている。1997年(平成9)から1999年(平成11)まで、大谷シーサイドフェスタにて公演(シーサイドフェスタ自体、2000年以降は参加団体の減少等により行われていない)。1999年には、大みそかに開かれた花火大会(ドンパチ2000)にも参加。2010年8月4日のみなと祭りオープニングセレモニーにて披露。震災後、2012年にはテレビに取り上げられた。

後継者の育成が大きな課題となっている。練習の機会を持ってもなかなかうまくいかないという。唄は口伝で伝えられてきたので、唄の後継者を現在探している(2012年現在は聴き取りを行った2名が唄を担当している)。踊り手と合わせて、今後の大きな課題である。

大谷シーサイドフェスタで演武を行った際には、竹を切って櫂に見たて、会場の人と一緒に演じた。昔からある唄の文句や節を変えるのには抵抗があるが、それらに踊りなどを付け足すことに

関して抵抗は無い。なお、1997年(平成9)に踊りを保存会で教えたのは西崎流新舞踊の先生であった。会員のなかにその弟子がいたためである。

4. 鮪立大漁唄込保存会(7月15日17:30)

話を聞かせていただいた鈴木忠勝氏によると、会の成立時期は、1975年(昭和50)9月10日である。母体は、和船の頃から正月(旧暦の15日)に行われてきた唄い込み事はじめである。船から歩きながら唄い、終わりにになると家の玄関に着く。唄い終わると、お金やミカン(イワシの見立て。それらを捨てる子供らはカツオの見立てである)をまく。この唄い込み事はじめは、1971年(昭和46)に恵比寿棚で行ったのが最後である。会員は、昔は鮪立の人のみであった。記録では100人で、基本的には船員だが、牡蠣の養殖家やペンキ屋などもいた。現在では、会員になる条件は特にないが、若い人は漁に出るので、老人が多いという。震災による犠牲者はない。当時47世帯あった会員の内、21世帯の建物が被害にあった。職を失った者も多く、その数は半数ほどになるだろうとのことであった。道具の流出が一部あり、自宅に合ったカンバンとそれに付随したものである。

会費は一人当たり年1000円で、運営資金は寄付金、御祝儀である。会員自身も御祝儀を出すことが多い。今後の活動資金については大丈夫とのこと。

曲目は、前唄、本唄。櫂唄の文句もあるが、今は唄っていない。唄い手は一人で、のこりは囃し手である。唄の由来は、鈴木嘉右衛門が伝えたカツオの一本釣り漁の際に唄われていた唄(嘉右衛門の故郷である和歌山の新宮には残っていないため、この地で作られたものかどうかは不明)であるという。嘉右衛門の伝承以来、230年くらいは和船の時代であったが、大正の初めに動力船が入る。動力船になったことで、唄が廃れ始めたという。

唄は櫂の拍子に合わせて唄った作業唄で、大漁祝い唄であった。

練習は、唄い込みに関しては昔は少なかったが、

ここ4・5年は集会場等で練習を行っている。

会の財産は、カンバン、鉢巻き、手脱ぐい、昇り、大漁旗、和船の櫂で作ったもの、竿、木で作ったカツオ（20～30匹）である。これらの道具は、昔は初代会長の倉庫で保管していたが、今は集会場の倉庫で保管している。

演舞は、昔は基本的に、正月、八幡神社の奉納、牡蠣祭りで披露した。かつてはコミュニケーションの手段でもあった。また、みなとまつりには2006年（平成18）に参加している。

震災後、昔からつながりがある和歌山の新宮から、お見舞いが来た。保存会の立て直しは可能で、文化庁に立て直しのための助成が出来ると聞いて申請し、採択された。カンバン50着（1着8万円）、計約400万円の大きな助成があった。

2012年（平成24）にワークショップを開き、今後の活動方針を立てる予定である（インタビューが行われたのは2011年）。8月の4日、5日にTシャツ祭りがあるので、それに参加する。現在、カツオ一本釣りに記念碑の場所を示す看板を作成している。会員は減少しており、気仙沼市との合併直前に12～3名まで減った。その際に、解散を視野に入れたことがあった。その後、みなとまつり参加の要請があり、大々的に募集をかけて復活した。後継者については、減ったら補充する（引退した漁師など）。現在、鮎立以外の会員も2名いる。

鈴木氏によれば、「唄からは、その裏にある命をかけた猟師の生きざまが浮かんでくる」のだという。

この唄い込みについては、川島 [2003: 284] に詳しい記述があることを付言しておく。

○ 2012年度第二次調査（8月5日～8日）

1. 大島神社

第2期の調査日程では、まず8月5日に気仙沼市教育委員会に挨拶し、白幡勝美教育長とも懇談した。午後からフェリーで大島に渡る。大島神社では、小松勝麿宮司に大島の被災状況について聞く。宮司は49代目。世襲なので塩竈の養成所で神

職の資格を得た。

大島には13部落があり、多様な郷土芸能がみられる。大島神社の祭日は9月15日であり、もちろんもとは旧暦であるが、1965年（昭和40）から、新暦で行われるようになった。祭日に奉納される七福神などの郷土芸能のうちでも盛んなもののひとつが磯草の虎舞だという。これは昭和の初めからあったとされているが、戦争で途絶え、1965年（昭和40）に復活した。忘れられた部分を補うために唐桑の松圃から先生を招いて教わったとされている。もともとは踊りはブラクだけで伝えられてきたが、10年ほど前から島全域から会員を集めるようになっていた。子供がメインになって親がそれをバックアップする体制がうまくいっていた。13の村のうち10カ所で披露されるが、なかでも浦の浜での演舞がクライマックスであるといわれる。門戸を広げ、新潟など地方公演も積極的に受けているが、「みなとまつり」には出場したことがない。

小松勝麿宮司には、「本吉太々法印神楽」の資料もいただいた。当然ながら本報告書ではこの内容は咀嚼して盛り込むことはできない。

2. 磯草虎舞保存会（8月5日14:00）

保存会会長の小野寺清次氏から、話を聞かせていただいた。磯草虎舞保存会は、1965年（昭和40）、大島神社奉賛会の代表を務めていた小野寺清次氏（69）の伯父が、個人の稼ぎが安定し住民の生活がバラバラになった磯草地区をまとめようとしたのがきっかけで設立された。この際に使用した虎の皮は、1960年（昭和35）6月のチリ津波の際に流出したが、後に発見された。虎舞の伝承母体となったのは、1948年（昭和23年）に虎舞を始めた若者たちであり、青年会の男女が中心だった。当時、戦地から帰ってきた若者たちは、仕事がなく、浜でゴロゴロと寝転がったり、博打をするような状態だった。その頃はちょうど、カキの養殖を始めようとしていた時期で、地域住民の心を一体にするために何かやろうということになり、始まったという。

かつての小野寺氏の家には蓄音機があり、練習の際には3、4人の若者が出入りし練習していた。

ただ、1911年（明治44）生まれの小野寺氏の母が、8歳のとき、1919年（大正8）にみなとまつりで虎舞を見たといっていたと小野寺氏は語っていたが、小野寺氏の母が見た虎舞が磯草のものであったかは不明である。

基本的に構成員は磯草部落の人間であり、磯草地区全67戸の住民すべてが保存会の会員となる。磯草地区では、小学校に入学する年齢になると男子は全員強制で参加、女子は任意で参加としていた。会員人数は、大人（全戸から一人ずつ出る）が約70人と、子供たちが約25人の計約100人からなる。人員不足や少子化の影響で昨年（2011年）から大島中から子どもたちを募ることになった。また、子どもは昔（1948年か1965年）から参加しており、その後、女性も参加することになった。ただ、虎の役は「女性ははまらない」ということで男性が担い、女性は笛を吹く（現在4名）。

昭和の再興以降、虎の頭振りは血縁関係による継承の傾向があったようである。現青年部部長の宮部良克氏の父親、宮部誠治郎氏が、現在の形の磯草虎舞の初代頭振りである。宮部家はもとは鶴ヶ浦の出身で、良克氏は大島に来て四代目である。頭振りの二代目は誠治郎氏の末弟、留男氏。三代目は順当にいくと良克氏となるはずだったが、体格が良すぎて梯子にのぼれないことから、菅原国夫氏が継いでいる。四代目が小野寺清次氏。五代目が小松哲郎氏。震災前まで哲郎氏が頭振りを務め、震災以降若い人間に後を継がせている。

震災により、会員内では8名が亡くなった。直接の演者での死者はいない。震災後、大島を離れた人もいる。五代目頭振りを務めた小松哲郎氏も、仕事の関係で気仙沼市内に移っている。

津波により、道具類の一切を保管していた会館が、建物ごと流されてしまう。震災後、発見されたものはない。以下、各道具の流出状況を記す。大太鼓（108寸）20張、それより小さいサイズ（中太鼓）6張、小太鼓約20張、鉦打ち太鼓：2張、梯子（35尺のもの。約10メートル）、虎の頭2張、

虎の皮2張。うち一つは明治～大正初期にかけてのもので、木綿製のものだった。なお、流出した道具のうち、小太鼓の皮が一枚と脚一組のみが後日発見された。

被害金額は600万円ほど。梯子は大島に自生する檜を用いたものである。震災後、大島の檜が流されてしまい、再度作ることができなくなってしまった。現在、支援団体を通じて探している。

1965年（昭和40）に再興した際、一戸から年1000円・2000円（当時の金額）と花代を頂き、これらをためていって太鼓などをそろえた。震災後は、豊田財団から虎頭と皮、日本財団からは太鼓（1400万円相当）が寄贈された。虎頭は、松圃の千葉氏から頂いた。日本財団の「太鼓」の支援によって、磯草地区の若い人たちは「（虎舞を）やろう！」と気運が高まってきたと小野寺氏は語る。支援に対し、小野寺氏は「親が残して、やったことを見ていっからさ。俺の代で親不孝すんのかなって涙出ましたね。財団から太鼓が来たとき、涙が出ましたわ」と語る。

演舞には、「通り囃子」「シシヤグラ」「虎舞」「剣囃子」「カッコウ」「大漁節」「オイトコ」の全7つが伝承されてきた。みなと祭りに参加するようになってからは、「うんずら」「海潮音」の二つが追加された。新たに追加された二つは青年会議所に教わった。現在の子どもたちは「かっこう」などはやってない。目立つような曲を志向・伝承している。

伝承の由来については大きく二つある。まず、先述したように、小野寺氏の母親が8歳のとき（1919年（大正8年））には、すでに虎舞（のようなもの）は存在していたようである。このころ行われていた芸能の、正確な伝承由来は把握してはいないそうだが、カツオ漁と関係があるようである。明治末から大正の時期に漁船が和船から動力船、洋船にとって変わった。その時期に急激な変化を遂げたとみられている。

9月15日（旧暦。現在は10月）は釣りガツオの終了する時期に当たり、航海安全や大漁のお礼参りとして奉納していたのではないかと小野寺氏は

語る。

現在伝承されているものは松園虎舞をベースにしたもので、1965年（昭和40年）に松園から先生（千葉ふさお氏）から教わったものである。それ以前から残っていた虎舞をそのまま伝承しなかったのは、継承する人も年を取ってしまい、教えることができなかつたためである。

震災前には夏休みになると土曜午後から夕方まで練習し、9月15日に備えていたが、震災後は土日・平日の夜に教える人の仕事の都合に合わせておこなうようになった。

演舞は、大島神社の祭礼日に、神輿の御旅所（みたびしょ）にて披露する。なお、御旅所になっているのは大島地区の10部落だが、虎舞は13の部落すべてで行われる。小野寺氏によれば「地区の人が待っていますから」とのこと。磯草地区の御旅所は、代々麴屋（屋号）と決まっている。現在では、御旅所はたいいてい各地区の地区会館になっている。敬老会に招かれたこともある。

震災後一番初めの活動になったのは、昨年（2011年）9月18日の例大祭であるという（小野寺氏自身は、震災後はカレンダーを見てもいつがいつなのかわからなくなってしまったと語っている）。今後の活動として、2012年9月に大島神社で奉納、10月には新潟県柏崎市へ支援のお礼として虎舞を披露するために訪れる予定である。

小野寺氏によれば、虎舞は本来、大島地区でのみ披露され、島から外へ出ていくことはなかつたという。ただ、今回の震災で多くの団体等から寄付や支援をいただいたので、そのお礼ということで、今後は外へも出向いていく予定であるという。最近の磯草虎舞の様子については、以下の文献およびウェブページで見ることができる。赤坂友昭「磯草虎舞い保存会—宮城県気仙沼市」日本財団公益チーム編『むすびつなぐ—伝統芸能と復興への軌跡』日本財団、32-37頁。[<http://matsurikikin.com/report/isokusa> 2015年7月17日閲覧]にも採録。

※この後同じ話者に対して追調査も行っているが、その資料についてはまた後日紹介する。

3. 要害七福神舞保存会（8月5日15:30）

この保存会は戦後、要害地区の青年団を主体として結成された。正確な年代は、今回お話を聞かせていただいた小野寺文男氏にもわからない。地縁関係に基づいた組織である（大島全土の特徴として、島内での結婚が多く、地縁・血縁関係が色濃く残っている）。また、階上地区との交流も盛んだった様子である。地区内の90戸全戸が加入しているが、もともと要害地区だったのはそのうち80戸ほどである。後は新規で引っ越してきた世帯である。なお、要害地区は行政区域では大島2区になる。会の代表は長年小野寺氏が務め、自治会長も兼任している。

震災による人的被害は、なかつた。保存会の所有物はすべて金毘羅山にある自治会館に所蔵していたため、被害を免れた。会費はなく、また、公演の際のお花等ももらっていない。しかし、文化協会に所属した際には、各戸から1000円集める。

保存会の前身が七福神舞を始めたのが1941年（昭和16年）ごろである。当時、奉年祭に参加する際に何をやろうか悩んでいたところ、要害地区にたまたま七福神舞（トウキチマイ）を踊れる人がいて、その人から教わって始まった。旧暦3月10日に金毘羅山に奉納したという。

演舞のための練習は行われていない。それは、会のメンバーがほとんど踊れる人のため、改めて練習する必要がないためである。ただ、今後、若い人たちの加入に伴って、練習を行っていく可能性はある。

演舞披露の場は、旧暦3月10日の奉年祭、みなと祭り、8月20日にある地区の盆踊りである。また、1998年（平成10年）、竹下景子がレポーターとして大島を訪れた際に触れられたことがある。なお、TV等では、要害七福神舞としてではなく大島七福神舞として紹介されているようである。

4. 只越芸能保存会（8月7日17:00）

同じ唐桑町の只越地区では、約160～180年前に気仙沼地方（広田町黒崎）から伝わったとされ

る七福神舞を伝承する。気仙沼市唐桑総合支所保健福祉課課長兼保健福祉センター所長小野寺健氏が応じてくれた。

七福神舞は、漁業の近代化により遠洋漁業が盛んになると若者が家を留守にする機会が増え、舞われる機会が減少していった。また、大漁祝の宴席が料亭などで催されることになっていったのも芸能披露の機会減少に拍車をかけた。その後、昭和20年代までは青年団が祭りで踊ったり、祝の座席で老人たちが舞を披露していただけだという。

1975年（昭和48）の9月3日に、小原木小学校の百周年記念式典において久しぶりに披露の機会を得ると、それまで青年団を中心に舞われていた舞を保存会として伝承していくことが決められ、青年団で踊っていた人たちが会の中心となり保存会が結成された。継承の途絶えがちだった七福神舞がこの年の式典において披露された背景には、1970年代半ばごろに近隣の館地区の村上長寿という人物が打ち囃子を伝えたことによると推測できる。当時伝わった打ち囃子は、現在では太鼓のたたき方も舞われ方も変化したが、これをベースにしている。

保存会のメンバーシップは地縁・血縁関係に基づいていると言える。母体となった当時の青年団団員たちは、平成になるまで会の中心を担った。

保存会には、地区の115～120戸全戸が加入する。保存会の結成当時から、地区内で全戸加入していたという。メンバーの構成は、七福神舞をする子ども、打ち囃子、20代の若者による神輿、舞などの指導を行う中高年の役員である。そのうち子どもは約20～30人（小学5年生5名、4年生5名、3年生～1年生が数名）である。震災前から、毎年4月半ばと8月に総会を行っていたが、4～5人程度しか参加しないという問題があった。

活動経費としては震災前には会費1000円を各戸から集めていた（現在は集めていない）。その他、市や自治会からの助成金、祭典時のお花がある。お花は1万円前後で、踊り子の持つザルに投げ入れられる。祝儀が青年会から1本（2～3万円）出された。

震災による保存会の被害は、人的被害として死者および行方不明者計7名が犠牲になった。その他、地区の家屋のうち全半壊37世帯、浸水等で6世帯（修繕し復旧済み）、倒壊が1世帯あった。只越地区の「組」の一つが津波の被害を受け、仮設住宅での生活を余儀なくされている。その組は9世帯中8世帯が被害を受けた。そのため、9つあった組は現在8つに減少した。

また、練習場所と道具の保管場所を兼ねていた只越老人憩いの家が流出全壊し、道具や備品のすべてが失われた。その内訳は以下の通り。大太鼓6鼓、小太鼓15鼓、衣装（七役分）一式、マワシ30枚。これらの総額は200万円ほどである。この他にも、笛15本、紅白幕数枚、たすき30本、手甲30本、鉢巻30本、山車（リヤカーを改造）1台、ノボリ1対、室内用アンプ一式、車載用スピーカー一式が流出した。全て揃えたとすると約300万円から400万円かかる。

震災後の1年間は活動休止状態に追い込まれたが、今年4月には総会を開催（役員体制の承認、外部資金を活用し道具等の復旧に全力を挙げて取り組む方針を決定）。当面課題とされる道具類の新調ができ次第、伝承活動の再開に向けて動き出していきたいという。そのための資金として、2011年9月ごろより義捐金を頂き、また市教育委員会の紹介により各種財団等の助成金申請を行っている。現在、2件が採択され、公益法人文化財団芸術研究助成財団（ヒマラヤ財団）から80万円の支援、SAFE（SAVEか）THE CHILDRENから30万円の支援などを活動資金に充てている。資金の用途はついてきているので、その資金の範囲で太鼓と衣装の新調に取り組んでいる最中である。

演目は、「七福神舞」「道中踊り」「打ち囃子」（「剣囃子」「下がり」「上り」「カッコ」）。太鼓の叩き方、踊りの舞い方はここ30年で変化したという。七福神は160年から180年ほど前に陸前高田から伝承された。

演舞を披露する場合は、5月3日（旧暦）の宇賀神社並びに八雲神社祭典、リアスカ祭り、地区

福祉まつり，地区市民文化祭である。震災後は今年の11月におこなわれるかき祭りでの披露を考えている。助成も受けたので練習だけでもしたいし，只越地区の人の前で披露できればと小野寺氏は語っている。

今後の継承に関しては，七福神を担う児童が不足しており，その舞手の確保が問題視されていた。児童のみで担ってきた七福神舞に，大人がまざるのは違和感があるとして，会員となる児童をいかに増やすかが課題となっている。

なお冒頭で触れた筑波大学の実習報告書が触れているのは，この地域である。

(以下Ⅲとして本誌に掲載予定)

<注>

1) 寄りあいでの議論については，宮本常一『忘れられた日本人』所収の「対馬にて」などにみられる有名なエピソードがある。宮本が，対馬にある伊奈の村に滞在していた時，村に古くから伝わる帳箱の中に，文書があることを知り，それをしばらく拝借できないかと頼んだ。すると，そういう問題は「寄りあい」にかけて，皆の意見を聞いてみなければならぬという。そこで，寄りあいが終わるまで待つことにしたが，朝から午後3時になっても結果が分からない。しびれを切らした宮本が寄りあいの場へ行ってみると，まだ寄りあいは続いていた。事情を聞いてみると，村で取り決めを行う場合，みんなの納得のいくまで何日でも話し合うのだという。宮本が寄りあいの場へ行った時，協議は2日目に突入していた。村の老人の話によれば，寄りあいは結論が出るまで続くが，3日もあれば，たいていの難しい話も方がついたという。気の長い話であるが，とにかく無理はせず，みんなで納得のいくまで話し合った。そのため，結論が出ると，それはきちんと守らなければなら

なかった。宮本によれば，日本中の村がこのようであったわけではないが，すくなくとも京都，大阪から西の村には，こうした村の寄りあいが古くから行われてきていたという。宮本はこの例以外にもいくつかの場所で類例を報告していたと記憶する。周知のことだが，改めて想起しておきたい。

2) 岩崎 [2012] によれば，この山は手長山であるとされている。虎舞について進んで考える場合，佐藤 [1992]，神田 [1995] とならば必読であろう。

文 献

- 相澤卓郎・齋藤良治・土取俊輝・梅屋潔 2013 「気仙沼市における無形民俗文化財の調査記録 (I)」『地域構想学研究教育報告』第4号，東北学院大学教養学部地域構想学科，22-40頁
- 岩崎敏夫 (編) 1971～1981 『東北民俗資料集 (一)～(十)』仙台：万葉堂書店
- 岩崎真幸 2012 「三陸沿岸の虎舞と平磯虎舞」『民俗芸能』通巻92号，26-37，民俗芸能刊行委員会
- 梅屋潔 2012 「遠くから私が気仙沼にこだわるいくつかの理由—『ドキュメント』のひとつとして」『震災学』第1号，249-278頁
- 川島秀一 2003 『漁撈伝承』法政大学出版社
- 神田より子 1995 「日本の虎舞と虎文化」『自然と文化』50，日本ナショナルトラスト
- 佐藤敏彦 (編著) 1992 『全国虎舞考—虎・とら・トラ資料集成』釜石市地域活性化プロジェクト推進本部，釜石市
- 筑波大学民俗学研究室編 2000 『平成11年度民俗学実習Ⅱ・文化人類学実習Ⅱ報告書—宮城県本吉郡唐桑町』筑波大学民俗学研究室
- 千葉雄市監修 2004 『本吉太々法印神楽』本吉太々法印神楽編集・発行
- 宮本常一 1984 『忘れられた日本人』岩波文庫